

国際共同研究事業 令和3(2021)年度実施報告書

令和 4 年 4 月 28 日

独立行政法人日本学術振興会理事長 殿

[日本側代表者所属機関・部局]

立命館大学・文学部 日本文学研究学域

[職・氏名]

教授・赤間 亮

[課題番号]

JPJSJRP 20211708

1. プログラム名 英国との国際共同研究プログラム(JRP-LEAD with UKRI)

2. 研究課題名

(和文) 上方文化サロン: 人的ネットワークから解き明かす文化創造空間 1780-1880

(英文) Creative Collaborations: Salons and Networks in Kyoto and Osaka 1780-1880

3. 共同研究実施期間

令和 3 年 12 月 1 日 ~ 令和 6 年 11 月 30 日 (3 年 0 ヶ月)

4. 相手国側代表者(所属機関名・職名・氏名【全て英文】)

British Museum・Curator・Akiko Yano

5. 当該年度実施状況

- ・当該年度実施計画書の「当該年度実施計画の概要」の内容と対応させつつ、当該年度の実施状況を簡潔に記載してください。再委託又は共同実施を行った場合は、それぞれの実施状況がわかるように記載してください。
- ・当該年度又は前年度(複数年契約を締結し繰越を行った場合)の各費目における増減が研究経費総額の 50% (この額が 300 万円を超えない場合は 300 万円)に相当する額を超えた場合は、その理由と費目の内訳を変更しても計画の遂行に支障がないと考えた理由を記載してください。

2021 年度は、オンライン型連携型研究モデルを効率的に進めるため、本研究課題の研究対象となる一次資料のデジタル化を中心に実施した。なお、すでにデジタル化されている作品については、先行的に ARC のデータベース・デジタルツール群である「ARC リサーチ・スペース」を使った翻刻・データ入力を開始している。また、蓄積した人物情報を分析する上で、基盤データとなるデータアーカイブとしてのオンラインデータ蓄積型「文化人・芸能人 人物名データベース」を準備した。打合わせは、すべてオンライン会議システムを活用し、今年度は旅費を一切使わなかったが、予定していた研究内容については、順調に進めることができた。

1. SISJAC でのデジタルアーカイブトレーニング及び大英博物館のオブジェクトのデジタル化(東野・赤間)

英国の資料に関しては、ARC 側から、デジタル化のプロセスを指導して、英国側にノウハウを普及させるために、研究参加者の1名を派遣し、ARC のパートナー機関である英国の SISJAC(セインズベリー日本藝術研究所) の協力の下、「ARC デジタル・アーカイビングモデル」を使ったトレーニングを実施する予定であったが、COVID-19 のため、派遣型トレーニングは取りやめ、オンラインによる実践型指導に切替えた。

人材としては、SISJAC を通じて、イーストアングリア大学の院生・若手研究者らに呼びかけてチームを形成し、実践現場としては、大英博物館の他、ヴィクトリア&アルバート博物館の日本部門にも協力を得て、資料撮影を実施することができた。今年中のトレーニングにより、次年度は一段と高い技術習得も含めて、本研究課題に直結する大英博物館所蔵資料のデジタル化を進める。

2. 立命館大学 ARC コレクションのデジタル化(佐藤)

本研究課題で対象となる摺物・掛軸などの資料は、立命館 ARC も所蔵しており、これらの内、未デジタル化部分について、74 件の作品のデジタル化を完了した。

3. 白澤庵コレクションのデジタル化(赤間)

本コレクションは、京都在住ポール・バーリー氏のコレクションである、40 年以上にわたって蒐集した江戸から近代にかけての日本絵画コレクションで、全体としては、3000 点程度の量と予想されていた。本年、このコレクションのデジタル化を進め、さまざまな例外的事例もあって進捗が心配された事態もあったが、無事、予想されていた点数の約 3000 点のデジタル化を終えた。

しかしながら、これに加え 500 点以上の作品が存在することが判明した。次年度、これらをできる限り早く完了し、白澤庵コレクションの全貌を把握したい。なお、本研究課題の準備プロジェクトの位置づけで行われていた研究の成果として、「サロン! 雅と俗一京の大家と知られざる大坂画壇」展が京都近代美術館で 3 月からスタートした。ここにも、白澤庵コレクションからの出品がある。

4. 大英博物館・立命館大学 ARC・白澤庵コレクションのデータベース登載(赤間・東野)

上記の内、立命館大学 ARC、白澤庵コレクションのデジタル化された資料の画像データを ARC 絵画データベースに登載した。なお、大英博物館資料については、データファイルを入れた HD の移送に当っては、COVID-19 とロシア・ウクライナ戦争の影響により、大幅な遅延となり、ファイル処理・データベース登載は、次年度となる。

また、本プロジェクトが重視する資料の要素を検討し、ARC の現状のデータベースシステムに対して、小規模の改修を行った。

5. 関西大学コレクションのデジタル化に関する打合わせ(赤間・中谷・平井)

関西大学の江戸後期上方絵画コレクションは、現在 300 点ほどがオンライン公開されているが、その残りの作品や摺物コレクションがあり、これらを本プロジェクトが対象資料とする計画である。今期、本項目の担当者間で、若干の打

合わせを実施できたが、中谷が、関西大学を退職している関係から、関西大学関係部署との交渉に時間を要しており、関西大学図書館担当者との本格的なデジタル化交渉は、次年度に実施されることになった。

6. 既存データベース登載資料を使った、翻刻・データ入力。(メンバー各自)

既にデジタル化されている摺物作品を中心として、先行的に作品はデータベースに登載、画像もアップロードしており、オンラインで精細な画像を確認しながら、メタデータ、画中文字等を編集できる状態にある。そこで、作品中のテキストの翻刻を進めた。翻刻にあたり、メンバー各自の作業と同時に、日本側では、解読能力を持つ専門家メンバーを雇用し、翻刻を進めた。これにより、常時最新の作業状況を、日英の研究メンバー、ならびに翻刻メンバーが確認しながら、また、文字検索も同じデータベース上で行って、正誤の確認をすることができるようになっている。

しかしながら、難読事例が予想以上に多く生まれており、翻刻専門家チームの充実が課題となっている。

7. 蓄積した人物情報を分析するデータアーカイブとしての「文化人・芸能人 人物名データベース」を本プロジェクトに合致するよう改修、ならびに情報抽出対象となる資料のリストアップ。(赤間、東野)

翻刻作業に伴い、抽出できる人物情報を効率良く構造化された情報とするため、「文化人・芸能人 人物名データベース」の改修を行い、テスト入力を行った。また、人物名データベースの充実のために、江戸時代に刊行された人物名鑑類のリスト作成、近代以降に編集出版された人名事典のリストアップとデジタル化を行い、本プロジェクトにとって基盤となる、人物情報蓄積のための準備をすることができた。

8. ARC リサーチ・スペース利用に関するメンバー向け説明会の実施

本プロジェクトに関わる打合わせは、すべてオンラインミーティングシステムを活用して実施している。

2月3日に研究メンバー・協力者全員が参加したスタートアップミーティングを実施した。この中で、研究システムについて詳しい説明を行い、データベースへのアクセス方法、編集方法などを確認した。これにより、参加者の内、中心メンバーは、直接リサーチ・スペースにアクセスし、ログインすることで各データベースの編集・データ蓄積を実現している。

なお、さらなる詳細な利用方法についてのワークショップは、次年度5月に実施することになった。

京阪文化サロンリサーチ・スペースに含まれるデータベースは、

- 1, 京阪文化サロン人物名データベース
- 2, 京阪文化サロン関連年表データベース
- 3, 摺物データベース
- 4, 京阪文化サロン絵画データベース
- 5, 京阪文化研究文献データベース

の五つであり、これらのシステムを今期作成し、データ蓄積の準備ができた。

なお、今回デジタル化し研究対象とする中心的な資料である京阪で出版された大判摺物について、海外では、ジュネーヴ市立歴史博物館所蔵品、約100点をARCデータベース上に登載することができた。また、早稲田大学図書館が所蔵する雲英文庫には、多くの俳諧摺物が含まれており、オンライン公開されたのを切っ掛けとして、本データベースへの収録を進めている。引き続き、関連する他機関の資料についても、可能な限り調査を進めている。

7. 研究発表(当該年度において本共同研究の一環として本事業による支援を受けたことを明示して発表したものについて記載してください)

[雑誌論文] 計(0)件 うち査読付論文 計(0)件

通番	共著の有無 ^{*1}	著者名、論文標題等 ^{*2}
1		
2		
3		

[学会発表] 計(0)件 うち招待講演 計(0)件

通番	共著の有無 ^{*1}	発表者名、発表標題等 ^{*2}
1		
2		

[図 書] 計(0)件

通番	共著の有無 ^{*1}	著者名、著書名等 ^{*2}
1		

*1 相手国側参加者との共著(共同発表)がある場合は○と記入。

*2 当該発表等を同定するに十分な情報を記載すること。例えば学術論文の場合は、著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年(西暦)、最初と最後の頁、掲載論文の DOI、学会発表の場合は発表者名、発表標題、学会等名、発表年(西暦)、発表地(国名、国外開催の場合のみ)、図書の場合は著者名、著書名、出版社名、発行年(西暦)、総ページ数、ISBN、など(順番は入れ替わってもよい)。相手国側参加者との共著となる場合は、著者名が複数であっても省略せず、その氏名を記入し下線を付すこと。

*3 足りない場合は適宜行を追加すること。

8. 本事業による産業財産権の出願・取得状況(当該年度に出願又は取得したもの)

[出 願] 計(0)件

通番	産業財産権の名称、発明者、権利者、産業財産権の種類、番号、出願年、国内・外国の別
1	

[取 得] 計(0)件

通番	産業財産権の名称、発明者、権利者、産業財産権の種類、番号、取得年、国内・外国の別
2	

* 必要に応じて、欄を追加してください。